

文章
讀本
向井敏



文春文庫

文章読本

定価はカバーに
表示してあります

1991年11月10日 第1刷

著者 向井 敏

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-717002-7

文 春 文 庫

文 章 読 本

向 井 敏



文 藝 春 秋

名文の条件

——序に代えて——

林達夫に「三木清の思い出^{*}」と題する文章がある。昭和二十年三月、治安維持法違反のかどで収監され、敗戦後まもない同年九月末、占領軍による政治犯釈放指令を旬日のちに控えながら獄中で病死した非運の友人三木清を弔って書かれた回想記で、三木清の死後一年余を経て、雑誌「世界」の特集した三木清追悼の一つとして発表された。名文家で聞えた林達夫の文章のなかでも、ことのほか印象的な一篇である。

弔辞といい回想記とはいっても、しかしこれは世のつねの追悼の文章とはいちじるしく趣を異にする。大学時代から親しくしてきた友人の人柄と業績に対する辛辣^{しんろうつ}で容赦のない批評からそれははじまり、巻をひらくなり読む人をたじろがせる。その冒頭、「手紙」の章を引いてみよう。

京都帝国大学に在学していたころ、私は吉田山にある親の家に、そして三木清はたしか北白川の下宿に住んでいた。距離でいえば二マイルの余も離れてはいなかっただろうのに、

彼はある期間中何かにつけて非常にために私に手紙を書いて送りつけて来たことがある。それは折に触れての随想のようなものではあったが、明らかに彼が恋愛の季節にあることを匂^{にお}わせていた。

しかしそれはそういう際に自然に起こりがちな告白欲から来る何物かからはおよそ遠いものであった。何といったらよいであろうか、プラトニックといってもよいが、それにしてもそれは一種言い様のない銜^{げん}氣に満ちあふれたものであった。差し当たり私はコンフィダントという配役どころをあてがわれたわけだが、この役廻りは彼の相手が私の以前からの女友だだったからという理由によるばかりでもなさそうであった。彼は私を選んで、彼の感情生活の歴史的目撃者たらしめようともくろんでいたのである。

彼は自分の手紙が当然私によって大事に保存され、それが後々に至って人々の好奇心や史的詮^{せん}索の対象になるということを信じて疑われない様子であった。パウロの書簡とか、ゲーテとシラーの往復書簡とか、最初からあるいは将来において公衆の前にさらされることを意識して書かれた手紙の例は、文芸や思想の歴史において決して珍しいものではない。しかし遠い未来に編まれるはずの一卷の書簡集を自ら設計して、その中に占められる手紙の一つ一つの位置や意味まで吟味してそれを書くということは、これは稀有^{けう}のことになる。私の心持は戸惑いせざるを得なかった。これらの一連の信書の受取人は、そこに名前を記されている当の私ではなくて、結局未来の思想文学的公衆だということがありありと

うかがえたからである。

若い時代の三木清ほど心から名声に執着し、野心に燃えていた人間を私は見たことがない。これは彼が自分の力量と使命とについていたっていた強烈な自信のほどにもよるものであったが、私はそれを非難したり嘲笑したりする気持は当時も今も毛頭有していない。私がこの事を敢えて言うのは、私が若き三木清に見ただただひとつの純真さの状態は、逆説めくが彼が名声欲と野心とに駆られている瞬間に在ったからであり、そしてその払拭と止揚とにおいて彼の人生体験はそんなに永い手間を取らずに済んだらしいからである。後年の名利に超越したみたいな好々爺然たる彼をしか知っていないものにとつては、この時代の彼の稚拙愛すべき銜気の発散ぶりなどは夢にも想像されないことであろうと思う。

ところでその問題の手紙だが、私はその当時から既に歴史的な学問に深い興味をいだいていたくせに、あるいはゆえに、自分のをも含めて、人の書いたものの保存などということには一向熱心でなかった。歴史ほど人間の営みの空しさをしみじみ味わせてくれるものはない。三木は人選において大いに見込み違いをやったわけだ。幸か不幸か、私は先頃もさんざん方々をさがしてみたが、彼の手紙はもはやほとんど全部散逸させてしまったらしい。

印象にのこっているのは、ペンで几帳面に書かれた彼の書体を初めて見たときの怪訝の念である。晩年になってからは一種気安な風格を帯びて来てちよつとばかり支那の金冬

心の墨蹟を想わせるまでに立ちいたったが、あのばかばかしい字体を真面目に根限り書いていたのが——今なら、その頗る奇怪だが、またそのどこにもふぎけたところ、あてこみどころのない、しかもそれでいて翩々たる才気となかなかぬけ目のない計画をもっているとてもいいたい書風を、やはり金冬心風とでも評するであろうが——当時はこれも私の謎の一つであった。どんな手続きによってあんなスタイルを発明したのか、私はついに解することができなかった。三木清の純然たる独創は、彼の手をつけたあらゆる分野を通じてこの怪奇な書風ただ一つであったと私は今でも思っている。

林達夫の批評の直截と辛辣は早くから鳴りひびいていて、その恐怖を伝えるエピソードがいくつも残されているが、戦前、この人が雑誌「思想」の編集にたずさわっていたころには、その痛烈な批評に直接さらされて音をあげる執筆者が絶えなかったらしい。自分で依頼した論文であっても、出来がだらしなれば遠慮会釈なく没にするし、表現に雑なところ、論旨に曖昧なところがあれば、手きびしい論難の手紙を執筆者に送りつけるのがつねだったというのである。昭和六年ごろ、同誌に「海外哲学論潮」を連載した清水幾太郎の回想によると、調べが行き届かなくて自信のもてない原稿を送ったりすると、間髪をいれず林達夫から手紙が舞いこみ、「あなたの文章のお蔭で、『思想』の名誉ある伝統は、無残に汚されてしまいました」といった調子で酷評されて、というより弾劾されて、あまりのことに顔色を変えたことが何度もあ

ったという。

この林達夫の手紙の話には後日譚があつて、のちに清水幾太郎が三木清と親しくなり、あるとき林達夫にこきおろされた一件を持ちだしたところ、聞くなり三木清は大笑して、「林達夫の手紙というのは、有名なんだ」と言い、やがて笑いを収めると、「林達夫は、あの手紙の調子で秘かに僕たちの批判を書き溜めているに相違ない。恐ろしいことだ」と語ったそうだが、三木清のこの推測と危惧は、少くとも彼自身に関するかぎり、もののみごとに的中したといわねばならない。ほかならぬ「三木清の思い出」がその証拠である。

それにしても、「三木清の純然たる独創は、彼の手をつけたあらゆる分野を通じてこの怪奇な書風ただ一つであつた」、つまり、三木清の生涯の仕事には独創と呼ぶに値するものは何一つなかったという、壊滅的な判定を下されることになろうとは、三木清もさすがに予想できなかったのではあるまいか。

右に引いた「手紙」の章だけでなく、あわれな結果に終つた三木清の恋愛事件の一部始終を語つた『「運命」交響曲』の章でも、京都大学の哲学教授のポストを得るといふ、若い三木清の「最大の野望」を葬り去つた、ある名流夫人とのスキャンダル事件の顛末を記した「シュタイン夫人」の章でも、三木清の人柄と行状に対する林達夫の観察と判断はそれこそ「恐ろしい」ばかりに容赦ない。

ためしに、「シュタイン夫人」の章の一部を引いてみる。ことわるまでもなく、シュタイン

夫人はゲーテの理想主義的人間観の形成に大きくかわったとされる年上の愛人、シャルロツテ・フォン・シュタインのことだが、最初の恋愛に失敗して「失意のどん底」にいた三木清の「慰め手として、しかしまた彼の生活設計の破壊者として」登場したある年上の女性を、三木清はシュタイン夫人になぞらえていたらしい。

私の中学時代からの友人である長男、三木がその家庭教師であった次男、そして私の女友だちがそのピアノの先生であった長女——それらの子供たちの母親でありしかも才知ある学問好きの未亡人であったその夫人との彼の交渉の歴史は、常識的にいえば彼の生涯における最も暗い一頁であろう。人の行動に対して極めて寛大且つ自由な見解をもっていた私でさえ、これには深い懸念をもったほどだから、周囲の人々の心労は察するに余りあるものがあつただろう。三木は明らかに最初は少なくとも受身的であつたが、しかし彼がそれに溺^{おぼ}れ出し、ついには得意然として私にその情事を誇示するに至って、私の彼に対する友情は急速に減退してゆくのをどうすることもできなかった。ある日、円山公園から清水寺へ至る山道を二人で散歩していたときのことである——彼はその新しい恋愛について語りながら、これは自分におけるシュタイン夫人の場合だという見解を表明した。その瞬間、私のところは彼から千里も遠いところにすっとんでしまっていた。

不幸なことに、この事件は一種のスクヤンダル視されて、ついに大学当局の耳にも入る

に至った。彼は大学院学生として模範的な特別給費生であり、最も有力なる、未来の教授候補者であった。生憎あいにくなことに、当時文学部の部長をしたりしていた重鎮のF教授は、私の父の友人であり、そしてまた私の保証人でもあった。一高時代、父との不和、闘争やその他のあれやこれやで日本という環境に愛想をつかしてしまい、一年間完全に学業を怠けた挙句、ついに私は永久にアメリカへ行ってしまうと決心したとき、父との和解に骨を折ってくれたのは、このF教授であった。アメリカへの移住を思いとどまったのは、私の恋愛であったが、父と和解して親の家に戻り、そこから京都大学の選科生として再び学校へ通うようになったのは、彼のおかげである。そんないきさつのあるF教授が、ある晩、その時は吉田山から既に西洞院通り中立売にしのだういん なかたちうりに引越していた私の家に珍しく突然訪ねて見えた。意外なことに、訪問の相手は父でなくて、私だというのである。この前例のない訪問の目的は、三木清の行状に対する私への訊問にあった。何事だろうと不安になっていた私の顔面はそれを聞くと自分でもわかるほど硬直した。三十分ほどしてその訊問から解放されたとき、私はF教授と三木清とそして私自身とに対してひどく腹を立てていた。このような証人台に立たされることは、言語道断なことと思われたのだ。

それは三木にとって極めて不利な証言であった。というのは、私はF教授から突っ込まれるままに、ありのままを答えざるを得ない羽目に立たされたからである。しかし今から考えてみると、三木があああの山林の散歩道で「シユタイン夫人」などというあんな大それた

言葉を口走らなかつたら、私はそんなにも「公平」に振舞わなかつただろうとも思う。情状酌量の余地がないと考へていたことが私の偏見だったかも知れないのである。

私は私の証言がF教授を、そしてひいては教授会の世論を三木に対して硬化させるに役買つたなどとは少しも思っていない。しかし当時としては三木の最大の野望であつた京都大学文学部で哲学教授の椅子を獲得するという見込みが、この恋愛事件——というより世間並みの言い方をすればこのスキャンダルによつて決定的に葬り去られたことは、疑えない事実のように思う。三木がいかに京都大学で講座を得ることに汲^{きゆうきゆう}々たる執着をもつていたかは、後にヨーロッパ留学から帰つてからの彼の言動にもまだはつきり痕跡^{こんせき}をのこしていた。三木が我々の勧誘にもかかわらず、東京へすぐには出て来ようとせず、永いこと京都にぐずついていたのは、我々から見れば全然見込みがないのに一縷^{いちる}の望みをなおも空しく京都大学につないでいたからである。

法政大学に彼がつとめるようになってから、ある晩、東京朝日新聞社講堂で公開哲学講演会が催されたことがあつた。三木清が壇上に立つ順番が来たとき、私は一人でぷいと講師控室を出て、講堂の二階席へ立ち廻^{りようりよう}つてみた。後ろの廊下から扉を排して中へ入つてゆくと、二階の聴衆は十数人という寥々^{りようりよう}たるものであつたが、ふと見ると、その中に見覚えのある小柄な中年の婦人が遠い壇上の方へ吸いつけられるように前身をのり出して見入っているのが横合いから私の視野の中に入った。私ははっと胸をうたれて、そのまま急い

で歩を廻し再び廊下に出てしまった。

それは問題の「シユタイン夫人」であった。

この種の回想記や追悼文、あるいは履歴解題などでは、故人の人間的弱点や履歴上の暗部を明るみに出すのはつとめて避けられ、触れたとしてもひたすら美化にはげむのがふつうで、勢い余って白を黒と言いくるめたりするのも珍しいことではない。三木清が京大教授に登用される望みをなくした事件についても、たとえば久野収のように、「留学前のあけはなしの異性関係が教授たちの小市民的リゴリズムの過敏神経をいたく刺激した結果だ」と、非はもっぱら大_学側、教授会側にあったかのように印象づけようと図ったり、三木清がよんどころなく京大を離れたことをさして、「アカデミーの特権的権威と自由よりも、民間の不自由と危険を選び、学問と民衆との仲立ちを果そうとした」*などと、もし当人が聞いたなら眼を丸くしそうな曲筆を弄_{ろう}した人がいる。

久野収流の言葉の詐術やイデオロギー的歪曲_{わいきよく}は論外としても、林達夫の「三木清の思い出」は褒め言葉たくさんの通常の回想記からはおよそ遠い。非業の死をとげた友人を悼む文章だからといって、その業績についてのかねてからの判断を枉_かげたり、その人柄、行状に対する不審をばかしたりした形跡はまるでないし、逆に、褒め言葉_{ほめごた}^{*}_{いって}は、篇末に見える「寛宏な温かさ」の一語を除いて、ほかにはまったく見当らない。そうした意味では、この文章が人物論

の極北と評されることがあるのも、もったいと思われる。

しかし、ここが「三木清の思い出」の大事なところなのだが、個々の章節だけについてみれば、どんなに邪険な告発者でもここまでは言えないだろうと思えるほど、手きびしい観察と辛辣な批評をあえてしながら、それでいて、読むうちに、故人への格別の親愛の情と深い悼みが透明な潮うしほのように行間を満たしていることに気づかされる。こういう友情の表現の仕方もあるのだと知らされて、肅然とした思いに誘われる。

この回想記にとりあげられた三木清に関する話柄は、すべて林達夫自身が直接関与したことである。人づてに聞き知った噂話うわさや風評やゴシップ、あるいは単なる見聞のたぐいは何一つ含まれていない。というより、きびしく排除されている。噂話ならば、肯定するにせよ否定するにせよ、気楽に構えて傍観者流の感想などを記しつければ、それでことはすんだかもしれない。しかし、林達夫はそうはしないで、自分自身が三木清の相手役としてじかに絡み合う場面だけをことさらに選んだ。しかも、三木清の立居振舞を録すると同時に、それに応じて自分がどう振舞ったかをも隠せず記すという困難を、あえてみずからに課したのである。

年上の夫人とのスキャンダルで三木清が京大教授の椅子を得る望みを失った一件についていえば、林達夫は、三木清にとって「極めて不利な証言」をしたのがほかならぬ自分であったことを、また、そんなにも「公平」に振舞ったのは三木清の口走った「シユタイン夫人」の一言のせいであったことを明しているのだが、得意げに「シユタイン夫人」を引き合いに出した三

木清も三木清なら、それしきのことで一人の人間の生涯の大事にかかわる審問の席で「不利な証言」をした林達夫も林達夫だと舌打ちする人もいるにちがいない。けれども、林達夫はそうした世間の思惑など、意に介していない。若い三木清は世間知らずで不器用で鼻持ちならない気取り屋だったが、そういう自分もまた、友人の弱点を笑って見すごしてやることもできない、神経質で狭量でつき合いづらい人間だったということを、むしろ知ってもらいたがっているようにも見える。

林達夫はこの回想記のために、キケロの箴言^{しんげん}「友情の努めが果たされるためには、一しよに何斗もの塩を食わねばならない」*multi modi salis simul edendi, ut amicitiae munus exple-*
tum sit. をエピグラフとして選んでいるのだが、じじつ、この一篇は三木清追悼であると同時に、著者自身の自己懲罰の文章という性格をも濃く蔵している。そうした事情は、末尾に配された「脱走者」の章にことによくうかがうことができよう。

三木清が収監されたのは、治安維持法違反の罪に問われて拘置されていた高倉テルが警視庁の拘置所を脱走し、三木清の埼玉の仮寓^{かぐう}に立ち寄ったのが直接の原因だが、林達夫もかつてそれと同じような状況に立たされ、かろうじて危機を免れたことがあったそうだ。

「脱走者」の章の記すところによれば、林達夫の実妹と夫婦関係にあったTと名のる共産党の活動家が広島の警察署を脱走、鵜沼^{うねま}の林達夫の自宅近くに現れたことがあって、そのとき彼は散歩を装って何度かTと話をかわしはしたが、ただし自宅には入れず、そのうち捜査の手が伸

びてきたのに気づくと、Tに報を発して身辺から遠ざかせたという。数か月たったある日の新聞に、一人の活動家が逮捕され、七十五日間も頑として口を割らずにいるという記事が出ていて、添えられた写真を見ると、「紛^{まご}う方なく、それはTであった」。

そうした経緯を語ったのち、林達夫はこう記して、「三木清の思い出」を閉じたのである。

私は運がよかった。私が多少とも交渉をもった非合法時代の共産党員は、野呂栄太郎にしろ、島誠にしろ、亡妹にしろ、そしてこのTにしろ、何度もつかまりながら、ついに一度も私に累の及ぶような口供をしたことはなかった。これは逆に言えば、私はこれなら信頼するに足ると確信することのできない人々には、一切どんな因縁があっても心を許そうとしなかったためでもある。三木の寛宏な温かさと私の狭量な冷たさは、こんなところにもあらわれているといえるだろう。――だが、それにしても、やはり運であった。

「寛宏な温かさ」。最後に置かれたこのたった一つの讃辞のなかに、さまざまな人間的弱点と未熟さをかかえ、不運に見舞われてばかりいた三木清への深い悼みが凝縮されているかのようだ。

繰りかえすが、「三木清の思い出」は非運の友人を弔う回想記としては異例にきびしい文章である。しかしそれは、当時の知識人のあいだでほとんど神格化されていた三木清の実態を陽^ひ

にさらそうとか、その人間的欠陥をあばく意外な秘話を披露して読者の興を惹こうなどといった打算や思惑からはるかに遠く、そうした思惑からくる翳りや湿り気やこざかしさや思いあがりとはきれいに縁が切れて、読後の印象は澄んで快い。またと得がたい名文中の名文といわなくてはならない。

着眼が新鮮であること。文意が明確であること。展開にとどこおりがないこと。人目を楽しませる彩りに富んでいること。人を動かす力を蔵していること。文章が備えるべき美德は数えあげていけばきりもないが、そのすべてに君臨するものがあるとすれば、それは晴朗で快いという徳であろう。

嫉妬。怨嗟。偽善。尊大。狡猾。媚比。甘え。暗みに傾くそういったさまざまな情念が人間から去ることがない以上、そのかもしだす湿りを帯びた文章もまた絶えることがない。さきに丸谷才一は『文章読本』*で、文章上達の要諦は名文を読むにつきると断じ、では名文とは何かと問うて、「君が読んで感心すればそれが名文である」と答えた。文章を書こうと志す人を勇気づける力ある言葉だが、ただし、感心した名文が湿った名文であったりすると、その人のこもる惨害の大いさもまたはかり知れない。世に湿った文章は数知れず、湿った名文というものもけっして少くないのである。

それだけに、陰湿な情念による侵蝕を可能なかぎり制御した、カラリと晴れて快い文章、